



本の泉社・3200円

# 戦後を「地球時代」と捉え

という感覚と意識が、地球規模で共有されている時代、あるいは共有されていく時代」だ。

著者はよく「1945年8月9日小倉が快晴だったら、私はいま存在していない」と話す。長崎に原爆を落としたB29爆撃機は、最初の目標、北九州・小倉が曇天だったため長崎に向かった。中学1年生の著者はこの朝、小倉で「建物疎開」に駆り出されていた。

「人間の成長とはどういふことか」を考えて教育哲学を専攻した著者は、平和主義を教育思想の中軸に据え、「語り部」として戦争の悲惨と平和への願いを綴り続けよう

卒寿(90歳)を迎えた著者による研究と思想運動の集大成。若々しい活動とその思想が率直に訴えられている。

堀尾輝久 著

著者はまず「その思考の座標軸を一九四五年におき、それを『地球時代』への画期としてとらえたい」とする。「地球時代」とは「地球上に存在するすべてのものが、一つの絆によって結ばれている

と心に刻んだ」という。本書では、「地球時代」とその課題認識、「地球平和憲章への歩み」に続き、第三部「平和への思想」では、「憲法九条と幣原喜重郎」、「丸山眞男の平和思想」、「往復書簡一人はなぜ戦争をするのか」をめぐる「アインシュタインとフロイト」などの16編の論考も収録した。

地球時代の平和とは何か？ 私たちがすべきことは何か？ 改めて考えさせてくれる本である。

ほりお・てるひさ 1933年3月生まれ。東京大学名誉教授。専門は教育思想史

丸山眞威・ジャーナリズム研究者

読書

価格はすべて税込み